方中履『切字釈疑』「発送収」の条を読む（「切字釈疑」第７節訳注）

富　平　美　波

１　はじめに

筆者はこれまで、「方中履『切字釈疑』「等母配位」の条を読む（「切字釈疑」訳注１）」（『アジアの歴史と文化』第13輯）・「方中履『切字釈疑』「切韻当主音和」の条を読む（「切字釈疑」訳注２）」（『アジアの歴史と文化』第14輯）・「方中履『切字釈疑』「門法之非」の条を読む」（『山口大学文学会志』第61巻）・「方中履『切字釈疑』「字母増減」の条を読む（「切字釈疑」第4節訳注）」（『アジアの歴史と文化』第15輯）・「方中履『切字釈疑』「真庚能備各母異状」の条を読む（「切字釈疑」第5節訳注）」（『山口大学文学会志』第62巻）・「方中履『切字釈疑』「啞噎上去入」の条を読む（「切字釈疑」第6節訳注）」（『アジアの歴史と文化』第16輯）において、「切字釈疑」の訳注と若干の考察を公表してきたが、本稿では、これらに続き、その第7節「発送収」の部分を取り扱ってみたい。

２　本文

第１節～第６節に引き続き、校合に使用したテキストは下記の５種類である。

〈底本〉

1988年7月江蘇広陵古籍刻印社が線装本で影印刊行した康熙年間汗青閣刻本『古今釈疑』の巻十七（「(底)」と略称。）

〈校合に用いたテキスト〉

①『四庫全書存目叢書』第99冊（子部）『古今釈疑』（中国科学院図書館蔵清康熙汗青閣刻本影印）の巻十七（「(存)」と略称。）

②『続修四庫全書』第1145冊（子部）『古今釈疑』（中国科学院図書館蔵清康熙十八年楊霖刻本影印）の巻十七（「(続)」と略称。）

③ 1990年7月上海古籍出版社が道光世楷堂刊本を底本として影印刊行した『昭代叢書』の「丙集」に収められている「切字釈疑」（「(昭)」と略称。）

④ 1971年5月台湾学生書局が国立中央図書館藏の旧鈔本を影印刊行した『古今釈疑（原題　授書随筆）』の巻十六（「(授)」と略称。）

次に、底本に従って本文を掲げ、テキスト間で本文の字句に異同がある箇所には、括弧付きの漢数字を付し、後に異同の内容を注記する。

本文を掲載するにあたって、割注と標点に関しては、下記の方法に従った。

・底本で割注であるものは、括弧でくくって記した。

・底本には点が施されているので、下記本文もそれに従って「。」を表示した。判読に苦しむ箇所は、適宜判断した。

Ⅰ　第７節「発送収」本文

發送収

玉篇舊譜。脣舌唇喉横列皆四字。而齒獨五字。蓋脣舌唇喉皆有五聲。以不用其字也。推一陰一陽之理。原有六位。亦以音不用而刪。齒所以五者。舌齒同司口之中門。人用舌激齒之聲常多。故此列之字。可譜而書。他列未嘗無其音。而(一)難于譜字耳。且商主肺。肺主音。是以屬之齒焉。實則前人未明啌聲噎聲。無處消噎聲之字。所以添贅一母。依如眞合清與從。心與邪。則齒僅三字。安有五乎。再并溪與群。透與廷。滂與平。(呂介孺特辨正定音近聽。竝音近聘。士龍竟改廷平。是也。)曉與匣。影與喻(二)。脣舌唇喉。亦無四字矣。且舊譜横列啌噎襍呼。直列平上去入。仄無啌噎。不更重複耶。故聲原定發送収爲横三。啌噎上去入爲直五。眞天然妙叶。不容人力者也。何謂發送収。如唇之綳。舌之東。脣之公。齒之樓。喉之翁。初發聲也。唇之鬖。舌之通。脣之空。齒之聰。喉之烘。送氣聲也。唇之菅。舌之膿。(辰州詈人爲膿包。其音作啌喉讀。江北謂兒女喁喁之喁。亦作能通切。)脣之翁。齒之鬆。忍収聲也。金尼閣曰甚。曰次。曰中。即是此意。初一聲發于中。第二聲送之。謂之次。後一聲用力而忍収之。謂之甚。合於釋談章之波梵摩。更何疑乎。或曰。四音皆符發送収。而宮獨先送後發。竟無収聲。何耶。蓋喉爲五音之統。既列之五音之尾。則在後主収。故先唱送聲。後唱發聲。無収聲者。四音之収聲。疑泥明心微禪。皆兼喉也。喉者。宮土也。土分位于四時之末。則此理矣。且黄鍾之本有◎字。(略近恩翁切。唇舌牙齒俱不動。而喉間作聲。)爲収聲餘聲之原。凡聲之忍収聲盡歸焉。即謂喉之忍収聲。寄于齒脣舌唇亦可。而宮尤與角通。角之収。即爲宮之發。故疑與影同母。以五音生自宮而終于角也。宮羽之通。以五音生完後輪之。則宮羽首尾相接也。河圖水一。地六成之。而洛書中五。合下一爲六。水土載人之本。

長生又同。喉唇爲内外總關。故宮羽尤通。縫唇無發。非夫奉全兼宮之送。而宮之影喩。亦兼縫唇之發也。

Ⅱ　テキスト間の異同

（一）（昭）は「而」を「特」に作る。

（二）（授）は「喩」を「兪」に作る。

３．訳注

Ⅰ　和訳

発送収

『玉篇』掲載の旧譜では、腭音・舌音・唇音・喉音はいずれも横列に４字が排列されており、歯音だけが５字になっている（1）。恐らく、腭音・舌音・唇音・喉音にも５声があるのだが、その字を用いることがない故であろう。一陰一陽の原理から推せば、元来は６個の位があるはずなのだが、やはりその音が用いられないため削除されたにちがいない。歯音だけが５個あるわけは、舌と歯とが共に口の中間の関門を司る器官であって、人が舌で歯を打って出す音は常に多いので、この列の字は韻譜の位置に従って埋めることができるからである。他の列は、別にその音が無いというわけではないのだが、譜に字を埋めるのがむずかしいのである。かつ、五音の「商」は肺臓を司り（2）、肺臓は音を司る。従って、これを歯音に属せしめるのである。しかし実際のところは、前代の人々はまだ「啌」声と「噹」声の道理がわかっておらず、「噹」声の字を欠くわけにもいかないので、そのために字母を１つ増やしたのである。李登（号如真）の方法にならって（3）、「清」母と「従」母、「心」母と「邪」母を合併してしまえば、歯音の字母はわずかに３字だけとなり、５つの字母などありはしない。更に、「渓」母と「群」母、「透」母と「廷」母、「滂」母と「平」母（呂介孺はとりわけて、「定」母の音が「聴」母に近く「並」母の音が「聘」母に近いことを解き明かし（4）、李登（字士龍）はこれらの字母を「廷」母・「平」母に改定した（5）が、正当なことである。）「暁」母と「匣」母、「影」母と「喩」母も併合してしまえば、腭音・舌音・唇音・喉音にも４字は無いことになる。加えて、旧譜の横列は「啌」声と「噹」声の発音がまぜこぜに排列され、縦の列は平・上・去・入の四声となっている（6）。しかし仄声には「啌」・「噹」の別が存在しないのだから、このやり方は重複ではないだろうか。そこで「切韻声原」は「発」・「送」・「収」を横３列に配置し、「啌」・

「噎」・「上」・「去」・「入」を縦５段に排列した（7）。こうしておけば、まことに、天地自然の音がおのずから調和するのと同じで、人の作為にねじまげられる余地がない。それでは、「発」・「送」・「収」とは何のことであろうか。例えば、唇音における「綳」、舌音における「東」、腭音における「公」、歯音における「樓」、喉音における「翁」は、「初発声」である。唇音の「鬖」、舌音の「通」、腭音の「空」、歯音の「聰」、喉音の「烘」は「送気声」である。唇音の「菶」、舌音の「膿」（辰州の人は他人をののしる時に「膿包」と言うが、その音は「啌喉」で発音する（8）。また、江北で子供を「喁喁」という「喁」の音も「能通切」で発音する（9）。）、腭音の「翁」、歯音の「鬆」は「忍収声」である（10）。金尼閣が「甚」・「次」・「中」と言っている（11）のも、また同じ意味である。初めの一声は中央から発し、第二の声はそれを送るので「次」と言い、後の一声は力をこめて忍耐しつつ収めるので「甚」というのである。仏教に伝わる「悉曇章」の「波梵摩」ともぴったり合っており（12）、疑ういわれは全くない。ある人が言うことには、四音はみな「発送収」に合っているのに、宮音だけは最初が「送」で後に「発」であり、なんと「収」声が存在しない（13）のは、どうしたわけかと。これは恐らく、喉音が五音の統括であって、五音の末尾に排列されているからには、しんがりにあって音を収めることを勤めとしているからであろう。故に先に「送声」を唱え、後から「発声」を唱えるのだ。「収声」が無いのは、他の四音の「収声」、「疑」・「泥」・「明」・「心」・「微」・「禪」がみな喉音の要素を兼ね備えている故である。喉音とは「宮」であり「土」である（14）。「土」が五行説において「四時」の後に位する（15）のがこの理に基づく。かつ、「黄鍾」の本には「◎」字が置かれ（やや「恩翁切」の音に近い。唇・舌・牙・歯がともに動かず、喉間で発音される音である。）「収声」の「余声」の源とされる（16）。すべて「忍収声」の音はことごとくこの音に帰する。すなわち、喉音の「忍収声」は歯・腭・舌・唇に寄託されていると言ってもさしつかえない。そして宮はとりわけ角と通じやすい。角の収声は、すなわち宮の発声である。だから、「疑」母と「影」母は同母なのである。五音は「宮」から生まれて「角」に終わるからである。宮と羽とが通じるのは、五音が生じ尽くして本に戻ると、宮と羽とがそこで互いに接するようになるからである。「河図」では「水」が「一」であり、「地」が「六」でそれを完成させる。そして「洛書」では中央が「五」であり下の「一」と合わせて「六」となる（17）。水と土とは人を載せる根本であり、「長生」もまた同じである。喉と唇とは内側と外側の総関門である。故に宮音と羽音とはことさら通じ合うのである。また、「縫唇」音には「発」がないが、これは「非」・「夫」・「奉」がすべて宮音の「送」を兼ねており、宮音の「影」・「喩」がまた「縫唇」の「発」を兼ねているからである。

Ⅱ　注

(1) ここにいう「玉篇旧譜」が何を指しているのか明確にしがたいが、第１節「等母配位」の条に「顧野王玉篇所載排位之本図」と同じものであるとすれば、第１節の訳注でも述べたように、『大広益会玉篇』の元刊本や明刊本の「玉篇広韻指南」に載っている「三十六字母五音五行清濁傍通撮要図」を指すとも考えられるが、後続の部分で、「旧譜」は縦列が平･上･去･入声の４段に分かれている旨を述べていることから見ると、上記の「撮要図」はこれに適合せず、「切韻指掌図」のような本格的な韻図を指していると考えたほうがふさわしそうである。また「撮要図」では「腭音」の名称を採らず「牙音」と称している点も「釈疑」の記述とは食い違いがある。ともあれ、同図に示されている五音・五行と字母との対応関係は次の通りである（建安鄭氏本を底本とする台湾・国字整理小組編、国立中央図書館発行『玉篇』による）。

角：木：牙音（見・溪・羣・疑）

徵：火：舌頭音（端・透・定・泥）・舌上音（知・徹・澄・孃）

羽：水：唇音重（幫・滂・並・明）・唇音軽（非・敷・奉・微）

商：金：歯頭音（精・清・従・心・邪）・正歯音（照・穿・床・審・禅）

宮：土：喉音（影・暁・匣・喩）

半徵：半火：半舌半歯音（来）

半商：半金：半舌半歯音（日）

(2) 第１節の訳注でも引用したが、『大明万暦乙丑重刊改併五音類聚四声篇』（国立公文書館蔵）所載の「経史正音切韻指南」巻首に掲げられている「五音分譬之図」や、「篇韻貫珠集」所載の「三十六字母清濁傍通撮要図」等によると、「木火土金水」の五行に対する五音と五臓の対応関係は次のようである。

五音	牙	舌	唇	歯	喉
五音	角	徵	羽	商	宮
五行	木	火	水	金	土
五臓	肝	心	腎	肺	脾

すなわち、歯音は五音の「商」にあたり、五臓では肺臓に対応する。

(3) 明の李登は、字を士龍、号を如真という。『字彙』巻末所載の「韻法横図」を作った李世沢（字嘉紹）の父で、『書文音義便考私編』の著者である。『書文音義便考私編』は、平声に三十一字母、仄声に二十一字母を立てる。旧全濁声母の音節が平声では陰陽２調に分岐し、仄声ではそうなっていないことを反映させて、平声のみに全濁音の字母を保存したものである。同書巻首の「書文音義便考私編目録」から関連記述を引

用すれば、次のようである。

「平聲字母

見　溪　羣　疑　曉　匣　影　喻（此八字爲一類、皆喉音。）

敷　奉　微（此三字爲一類、乃脣齒半音。）

邦　滂　平　明（此四字爲一類、皆脣音、内平字舊係並字。）

端　透　廷　尼　來（此五字爲一類、皆舌頭音、内廷字舊係定字。）

照　穿　牀　審　禪　日（此六字爲一類、正齒音。）

精　清　從　心　邪（此五字爲一類、皆齒舌半音。）

共三十一母、舊多知徹澄孃（即娘字）非五母、知重照、徹重穿、澄重牀、孃重尼、非重敷、重母下字、無非同音、不知其説、茲用三十有一而足。

辨清濁

清濁者、如通與同、通清而同濁、荒與黄、荒清而黄濁、是也。三十一母中、見邦端照精五母、皆有清而無濁、疑微明尼來日六母、皆有濁而無清、除此十一母外、其餘溪與羣、曉與匣、影與喻、敷與奉、滂與平、透與廷、穿與牀、審與禪、清與從、心與邪、十項、皆一清一濁、如陰陽夫婦之相配焉。然惟平聲不容不分清濁、仄聲止用清聲、悉可該括、故並去十濁母、以從簡便。

仄聲字母

見溪疑曉影　奉微邦平明　端透尼來

照穿審日　　精清心

共二十有一而足。」

(4) 明の呂維祺（字介孺）の『音韻日月燈』巻首「同文鐸」「音辨二」中の次のような叙述を指すものか。

「舌頭四母惟定母有訂聽二聲、此作母者乃聽聲也。而讀等子者多讀作訂聲。訂於徒徑切不合、而且于本母下同啼臺屯團田迢駝唐騰等字亦謬。」

「重唇四母惟並母、並蒲迥切、當作瓶上聲、或瓶去聲。今皆讀作兵去聲。則是幫母下字何以與滂互分清濁。其去本母下蓬皮蒲排瓶裒庖婆爬旁不亦遠哉。」

(5) 注(3) を参照。『書文音義便考私編』は、平声において、元の並母を「平」母に、定母を「廷」母に改めている。三十六字母の「並」と「定」はそもそも平声字ではないから、平声の声母の代表字としてはふさわしくなかったのである。また、仄声には全濁字母はないので、並母に対応する字母は登場せず、次清声母にあたる字母として「平」母が存在する事が興味深い。

(6) 注(1) 参照。

(7)「切韻声原」所載の「新譜」は、著者の方以智自身が「新譜」という標題の下に、

次のように注しているが、

「珙温直列平上去入，而横列崩烹朋蒙，皆四也，今直列啌噎上去入五聲，而横列發送収三聲，奇統偶也。」

横軸に「幫」・「滂」・「明」・「見」・「溪」・「疑」・「暁」・「夫」・「微」・「端」・「透」・「泥」・「来」・「精」・「清」・「心」・「知」・「穿」・「審」・「日」の二十字母を列し、縦には韻類ごとに「啌」・「噎」・「上」・「去」・「入」の区別に該当する枠を５段に重ねる構成になっている。例えば、最初の韻摂の「透」母の縦列には「通同統痛禿」の５字が縦に並べられているという具合である。

(8)「役立たず」や「能なし」という意味の罵り言葉「膿包」は『現代漢語詞典』にも収録されていることからわかるように、普通話の語彙に含まれると言ってもおかしくない語であるが、その発音は、規範的な辞書ではnóngbāoであって、第１音節が陽平調、第２音節が陰平調とされている。しかし、後続部分に掲げられた「能通切」という反切を考慮に入れて想像するに、著者の知る辰州人の口語では、第１音節の「膿」も陰平調に聴こえたのではあるまいか。『中国古今地名大辞典』等によると、明の「辰州」の故治は湖南省沅陵県にあったという。楊時逢著『湖南方言調査報告』（中央研究院歴史語言研究所専刊之六十六）には沅陵県の調査報告が含まれているが、そこでは通摂泥組（泥母と来母は区別されない）の音を陰平調に読む現象があるとは報告されていない。同県の方言における陰平調の調値は55、陽平調の調値は33であって、音の高さに違いがあるが、どちらも平坦な調子であるらしい。同書は湖南省の方言を５つの地区に分類しているが、沅陵県はその第５区に含まれ、同区は、湖北・四川・貴州各省との境界地域であって、方言は西南官話に類似しているとされている（p.1444）。方言語としての「膿胞」が『漢語方言大詞典』（復旦大学・京都外国語大学共同編集）に見えるが、それによると、

“〈名〉憨愚的人。㊀西南官话。云南昭通。姜亮夫《昭通方言疏证•释人》：“昭人谓人憨愚曰～。”㊁吴语。江苏海门、启东。”（第四巻　p.5007）

とある。西南官話や呉方言で用いられるらしいことがわかる。

(9)「江北」とは長江の北岸、唐の淮南道、宋の淮南路の境域を指すという。だとすると、主に現在の江蘇省・安徽省の長江より北の地域であるということができよう。従って現在で言えば官話方言の分布地域だと思われる。「喁」は『広韻』では、平声鍾韻疑母（魚容切）の音を持つ字で、字義は「喩喁」とあり、魚が水面で口をぱくぱくさせることを指すから、ここでの語義とは少し異なるかもしれないが、疑母の字であることを考えるとこれも規範的な発音であれば陽平調に読まれるはずである。ところがここではやはり「能通切」すなわち陰平調に聞こえる発音がなされていたのであろう。「喁喁」

という語は『漢語大詞典』に２つ出ており（第3巻　p.415）、１つは『広韻』の「魚容切」の音にさかのぼる yóngyóng の音をもって発音されるもので、語義は、

① 鱼口露出水面翕动的样子。

② 仰望期待貌。

③ 象声词。

の３つが挙げられている。①は『広韻』の義注と符合する。③の擬音語は、セミの声や、笛の音などを写すものらしい。いま１つは『集韻』の「元俱切」（平声虞韻疑母）にさかのぼる yúyú の音で発音されるもので、語義は、

① 随声附和。

② 形容人语声。

の２義である。②の「人語声」とは、低声でよく聞こえない、ささやき声のようなものを形容するらしい。

(10) ここで五音それぞれの「初発声」・「送気声」・「忍収声」の例として掲げられている例字の中古音における地位を示しておけば、次のようである（韻書の名を示していない音はすべて『広韻』による）。

唇音

発 「繃」　「繃」平声耕韻二等幫母　北萌切（『集韻』耕韻「繃、或作繃」）

送 「鼟」　『集韻』平声東韻並母　蒲蒙切

収 「菶」　平声東韻三等明母　莫中切

平声登韻明母　武登切

去声送韻三等明母　莫鳳切

舌音

発 「東」　平声東韻一等端母　德紅切

送 「通」　平声東韻一等透母　他紅切

収 「膿」　平声冬韻泥母　奴冬切

腭音

発 「公」　平声東韻一等見母　古紅切

送 「空」　平声東韻一等溪母　苦紅切

去声送韻一等溪母　苦貢切

収 「翁」　平声東韻一等影母　烏紅切

歯音

発 「樅」　平声東韻一等精母　子紅切

送 「聰」　平声東韻一等清母　倉紅切

収 「鬆」　平声冬韻心母　私宗切
　　平声鍾韻心母　息恭切
　　平声鍾韻清母　七恭切
　　去声送韻一等心母　蘇弄切

喉音

発 「翁」　平声東韻一等影母　烏紅切
送 「烘」　平声東韻一等暁母　呼東切
　　平声東韻一等匣母　戸公切
　　去声送韻一等暁母　呼貢切
　　去声送韻一等匣母　胡貢切

「釈疑」の掲げる字を見ると、喉音の初発声の例字「翁」は腭音の忍収声の例字と同一である。「切韻声原」の簡法二十字母では、暁母は喩母と共に疑母と合流している。従って、牙音の「収」であるとともに、喉音の「発」でもあることになる。「切韻声原」の二十字母の図においては、「疑」母に「角宮収即爲宮深發」、「暁」母には「宮淺發送」という注記がなされている。

(11) 金尼閣『西儒耳目資』の「甚・次・中」は、同書の「音韻経緯全局」等の韻図において、韻母を代表する50個の「自鳴字母」の幾つかを更に細分するための用語として導入されているものであり、同図のいわば「凡例」とも言うべき機能を持つ「問答」の部分では次のような説明がなされている（原文で1行を2字を横に並べて刻されている部分は括弧に入れて示した）。

「問曰。甚次何如。〇答曰。中華具其理。未具其名。甚者。自鳴字之完聲也。次者。自鳴字之半聲也。減甚之完則成次之半。如藥甚欲次。同本一音。而有甚次之殊。又如葉甚。一次。同本一音。而亦有甚次之殊。

問曰。有甚有次矣。但全局又有(中何)。〇答曰。中者。甚于次。次于甚之謂也。假如數。甚也。事。次也。其中有音不甚不次如胥。諸。書。是也。蓋數sú。午u在末者。粗也。事sú。午ù在末者細也。書xū。午u在末者。比於甚畧細。比於次畧粗。故曰中耳。

(中略)

問曰。甚次之別。綦難矣。辨之有巧法乎。〇答曰。減元母全聲之半。何有于甚次。且以出人口。開唇而出者爲甚。畧閉唇而出者爲次。是甚次者。開閉之別名也。」

「音韻経緯全局」の中で「甚・次・中」の表記がある箇所を全て挙げると下記のようである。一から五十までの番号で命名される各の自鳴字母の内部が、更に「甚」と「次」に（第五母においては「甚」と「次」と「中」に）細分されているのである。『耳

目資』はその間の微細な音色の差を、母音を表す記号の上下に点を打つことによって表示しようとしている。唯一、3つに分割される第五母を除いて、他の区別はすべて入声のみに存在する点が注目される。

第二母の入声	甚　e	次　ė	
第四母の入声	甚（悪）o	次　ȯ	
第五母	甚　u	次　u̇	中　ụ
第十四母の入声	甚（葉）ie	次（一）iė	
第十五母の入声	甚（藥）io	次（欲）iȯ	
第廿四母の入声	甚（斡）uo	次（屋）uȯ	

なお上記に掲げた『耳目資』のラテン字母による音表記と照合して見ると、引用した「問答」において取り上げられていた「數」と「書」と「事」の3つの字音の対立は、第五母における「甚・中・次」の区別を指したものと思われる。その他の挙例についても「葉」と「一」、「藥」と「欲」のように（上記では括弧に入れて示したが）、図の中に「問答」が掲げるのと同じ例字がわざわざ表記されているので、「問答」の記述と図との対応関係がおおよそ見て取れる。

この他にも、第十六母は、音表記としては「iụ」の１種のみが記され、対立する複数の音類が存在するわけではないが、「u」の下に点が付されている点や、「問答」中の次のような条の記述から考えて、

「問曰。如字有甚而無次。亦有次而無甚者乎。〇答曰。魚母中。無甚無次。併其子聚居驢之類。若甚而無次者更夥。故凡無點于其末者。皆甚而已。」

点のない音表記を持つ他の自鳴字母が「甚」類の音であるのに対して、この字母は「中」類の音を持つという点において特殊だと見なされているもののようである。

さらに、二重母音・三重母音の「自鳴母」における甚・次・中は、最初の母音 i や u には関わらず、後続の母音に見られる区別だという見解を示している（次の条の記述は恐らくその意味と思われる）。

「問曰。美哉。其細若此。但一字元母。二字子母。三字孫母。俱有甚次否。〇答曰。否。甚次中者。一字元母之德也。若二字三字母之有甚次中。則不在全母之上。單在其末。自鳴之字。如藥欲分甚次。不生之于衣i。乃生之于阿o。」

『西儒耳目資』に関する先行研究において、「甚・次・中」の区別は、ラテン字母の母音体系では記述しきれない韻母の母音の違いを区別しようとしたものだと解釈されるのが一般的だと思う。曾曉諭「《西儒耳目资》声韵系统研究」や、陸志韋の「金尼閣《西

儒耳目資》所記的音」等でも、韻母の主母音に差異（口の開きや、前後の差）のある音色の母音が推定されている。上で見た『西儒耳目資』本文の記述からもそう考えるのが穏当なところであろう。

ところで「釈疑」のこの部分は、下記の注（12）とも関連するが、「切韻声原」の二十字母の図の最後に見られる次のような記述を受けて書かれたものかもしれない。

「愚初因邵入, 又于波梵摩得發、送、収三聲, 後見金尼有甚次中三等, 故定發送収爲横三, 啌噎上去入爲直五, 天然妙叶也。」

いずれにせよ、「釈疑」の記述は『耳目資』の「甚・次・中」の区別を「発・送・収」と同等に見なそうとしているかのようである。「甚・次・中」の解釈としてはかなり独特のものだということができる。

（12）注（11）に引いたように、「声原」の二十字母の図には次のような注記が書き込まれている。

「愚初因邵入, 又于波梵摩得發、送、収三聲, 後見金尼有甚次中三等, 故定發送収爲横三, 啌噎上去入爲直五, 天然妙叶也。」

ここに見える「波梵摩」は、「釈疑」の「波梵摩」と用いられている音訳字も同一であり、悉曇の字母表に関する知識が「発送収」の区別の認識に資した事実が述べられていると見なすことができるだろう。梵語の子音は　pa・pha・ba・bha・maの５項対立を示すが、ここでは清濁の別は捨象して、無気音と有気音と鼻音という３項対立として捉えたものであろう。羅常培が作成した「四十九根本字諸經譯文異同表」で確認すると、pa・pha・maの３音に対してこれと最も近い音訳字を用いているのは、法顕訳「大般泥洹経文字品」、曇無懺訳「大般涅槃経如来性品」、慧厳修「大般涅槃経文字品」、であるが、いずれも「波頗摩」であって、phaは「梵」ではない。「梵」や「嚩」は、bhaの音訳において見られる（僧伽婆羅訳「文殊師利問経字母品」が「梵」、義浄の「南海寄帰内法伝」が「嚩」。ただし僧伽婆羅のmaは「磨」字。）のみで、今のところ「波梵摩」の出典は不明である。

（13）上の注（10）で見た「釈疑」の例字を見ると、喉音の発の例字「翁」は中古影母の音であり、送の例字「烘」は中古暁母或いは匣母の音を持つ字である。ここでは、『経史正音切韻指南』において、喉音の字母の排列順序が「暁匣影喩」の順になっている（ただし『切韻指掌図』は『韻鏡』・『七音略』と同じく「影暁匣喩」であるし、『玉篇』巻首の附録類でも「影暁匣喩」の順のものは多い）ことなどを指して言ったものではないかと思われる。

（14）「釈疑」は第１節「等母配位」の条において、唇音を宮音に当てる方法を採らず、鄭樵の『七音韻鑑』にまで溯るところの、喉音を宮音に当てる方法を正しいと主張し

ている。音楽の五音の宮は五行の土に配当されるから、喉音は土に対応する結果となる。

(15) 五行説では、土は中央に位する。そのため、木が方位では東、季節では春に、火が同じく南と夏に、金が西と秋に、水が北と冬に対応するのに対し、土は対応する四季の区別を持たず、また、各季節の土用に対応するともされる。

(16) 後述する本稿４を参照。

(17) 朱熹『周易本義』が掲載する「河図」では、下方に一と六、上方に二と七、左方に三と八、右方に四と九、中央に五と十が配置されている。同じく「洛書」は、中央に五、中央下方に一、中央上方に九、左方中央に三、左方上方に四、左方下方に八、右方中央に七、右方上方に二、右方下方に六を配する。なお『周易本義』の図を解説する元・熊良輔集疏『周易本義集成図』は、「河図」・「洛書」に関する「集疏」において次のように記述している。

「朱子曰、天地之間一氣而已。分而爲二、則有陰陽、而五行造化萬物終始无不管於是焉。河圖之位、一與六居北、二與七居南、三與八居東、四與九居西、五與十居中。蓋其爲數不過一陰一陽一奇一偶以兩其五行而已。陽數奇故一三五七九屬乎天、陰數偶故二四六八十屬乎地。天數五地數五、各以類相求。所謂五位之相得者然也。天以一生水、地以六成之。地二生火、天七成之。天三生木、地八成之。地四生金、天九成之。天五生土、地十成之。所謂各有合焉者也。積五奇爲二十五、五偶爲三十、合是二者爲五十有五、此河圖之全數、皆夫子之意而諸儒之説也。至於洛書、則雖夫子所未言、然其象其説、已具於前、有以通之。則劉歆所謂經緯表裏者可見矣。」(「劉歆所謂」以下の記述は、集疏がこれに先立つ部分で、「劉歆曰、伏羲氏繼天而王、受河圖而畫之八卦是也。禹治洪水、錫洛書法而陳之九疇是也。河圖洛書相爲經緯、八卦九章相爲表裏。」と述べているのを受けていると思われる。)

４.「切韻声原」の叙述と「釈疑」の関係

この「釈疑」第７節で解説されている「発・送・収」の区別は、著者の父方以智が「切韻声原」の中で導入した用語であり、声類の区分の手法である。

「釈疑」のこの節では、五行説に基づく一種の科学理念を援用しながら、呂維祺の『音韻日月燈』や李登の『書文音義便考私編』といった先行の研究成果を引いて、まず全濁字母を平声のみに存する陰陽調の区別に還元して、声母の清濁を「啌・喤・上・去・入」の五声調説に包摂させてしまう。更に、李登にならって「知・徹・澄・孃」と「照・穿・牀・審・禪」、「非」と「敷」を合併させ、李登は独立させている「影」母と「疑」

母とを、新たに併合してしまえば、旧三十六字母は、二十字母に改まり、「声原」が「収餘」とする「泥」母と「日」母を除く十八字母は、６組の「発・送・収」の組み合わせとして整然とした体系を成すことになる。次に掲げるのは「釈疑」が第７節の本文の前に掲載している「発送収新譜」の全文（原文は縦書き）であるが、これは「切韻声原」に見える二十字母の図とほぼ全同である。

發送収新譜

幫（羽初發聲）	端（徵發聲）	
滂（羽送氣聲）	透（徵送聲）	
明（羽宮忍收聲）	泥（徵宮收）	來（收餘）（商徵合宮）
見（角發）	精（商發）	
溪（角送）	清（商送）	
疑（角宮收即爲宮深發）	心（商宮收）	
曉（宮淺發送）	知（徵商合發）	
夫（羽宮送）	穿（徵商合送）	
微（羽宮收）	審（徵商合宮收）	日（收餘）（徵商合宮）

この方法で、旧来の五音の分類を大幅に乱すのは、「影･喩」の「疑」への併合、「曉･匣」の併合、「非・敷・奉」の併合によって残った「曉・夫・微」母を、元の喉音と軽唇音という不規則な組み合わせでありながら、一組の「発・送・収」を成すものとしてまとめてしまう点である。

「声原」の図では、「釈疑」の「発送収新譜」にはない記述が２カ所に記されているが、それらと関連する叙述も「釈疑」の本文中に見えている。

その一つは、「金尼閣曰甚。曰次。曰中。即是此意。初一聲發于中。第二聲送之。謂之次。後一聲用力而忍收之。謂之甚。合於釋談章之波梵摩。更何疑乎。」という部分で、これは注（11)･(12）で既に述べたように、「切韻声原」の二十字母の図の「愚初因邵入，又于波梵摩得發、送、収三聲，後見金尼閣有甚次中三等，故定發送収爲横三，啌噎上去入爲直五，天然妙叶也。」という記述と関連があると思われる。

もう一つは、「釈疑」の「且黄鍾之本有◎字。（略近恩翁切。唇舌牙齒俱不動。而喉間作聲。）爲収聲餘聲之原。」という部分である。ここに登場する三十丸の記号は、「切韻声原」にも現れる。その登場箇所は、「声原」の巻頭近くに掲載されている二十六字母の図（先にも引いた二十字母に「照」･「徹」･「孃」･「非」･「影」を残して二十六字母となる）と、これまで何度か言及した二十字母の図、更に巻末近くに位置する「六

餘声」の条である。

二十六字母の図では、軽唇音と喉音にも、「非・夫・微」と「影・暁・◎」の３つ組みの字母が立てられているが、この図の末尾に注して、

「共二十六母、不用非◎，則廿四也，合知照，則廿一也。」

と記し、ゆくゆく二十一(或いは二十)説を導く下地を残す記述を展開している。「◎」字母の下に列挙された例字は「唵、㘕、遏」の３字であって、零声母の鼻音韻尾あるいは入声の音節を代表するものであるようだ。近接の本文中でも、この「◎」について、「◎爲喉根，而非微乃外唇之最微者。非夫二字皆送氣聲，以非字最輕，標外唇之起耳。」、「今表◎字而爲折攝中輪，非字爲外唇風始，故存二十六切，實二十四，若通知照則二十一也。」等といった説明をしている。

後続する二十字母の図では、第１段目「見」母の位置と平行する第３段目の空欄にこの三十丸の記号を描き、次のような解説が施されている。

「恩，近恩翁切，而唇腭舌齒俱不動，此聲本也，即聲餘也。」

この解説は、ほぼ上に掲げた「釈疑」の記述に近い。更に、同じ欄の中で、次のようにも書いている。

「是名優佗南，是風觸七處，中土不用◎而無不用，所謂折攝鼻臍輸。」

ここに見えている音訳語「優佗南」は梵語のudānaに対応するものかと思われる。荻原雲来編『梵和大辞典』によれば、この語は男性名詞であれば「上風（体内五風の一）」を表し、中性名詞であれば漢訳の「自説」等に相当し、動詞udānaya（-ti）になれば漢訳の「讃」等に相当する。また、田久保周誉著『批判悉曇学』は「憂陀那（udāna）」について次のように説いている。

「悉曇字母殊に體文三十五字母は夫等の發聲の處即ち發聲時に於て氣息の觸るゝ口腔内の位處、或は口脣の形式によつて嚴密に分類されて居る。悉曇藏二に論ぜらるゝ七處の説の如きも梵語音聲分類説の一であつて、此の説は固と龍樹の智度論に發したものである。即ち同論六卷に『口中の風は憂陀那と名つく。還つて臍に入り、臍に觸れて響出づ。響出づる時七處に觸れて退す。是れ語言と名づく。偈に説くが如し。風は憂陀那と名づく。臍に觸れて上去す。此の風の七處の觸とは、項と及び齗と齒と脣と、舌と咽と又び胸を以てす。此の中に語言出ず』と云ふ。此の中憂陀那（udāna）とは上方に氣息を吐出する義である。古來の悉曇學匠は此の一段を解して曰く。即ち内風と呼ばるゝ吾人の氣息が外界の大氣なる外風を吸って丹田に入り胃海に起す波動に依つて發音する趣旨を説くものなりと云ふ。斯くの如く梵語の音聲を七個の發聲位處に分類した形式は相傳悉曇學及び近代梵語學の夫れと全然合致はしないが、恐らく此處に云ふ七處の音とは五類聲及び所謂遍口聲所攝の字音を半韻と吹音とに二分して是等

を合算したものと推定出来る。」（pp.54～55）

ここに引かれている龍樹の「大智度論」の一節は、第六巻の「論」の一部で、上記『批判悉曇學』に引用された部分は後半部が「偈」の一部にかかっている。

「如人欲語時。口中風名憂陀那。還入至臍觸臍響出。響出時觸七處退。是名語言。如偈説。

　　風名憂檀那　　觸臍而上去

　　是風七處觸　　項及齗齒脣

　　舌咽及以胸　　是中語言生」（鳩摩羅什訳　大正蔵　第25巻　p.103）

これらによると、口中の各部位に触れて諸々の子音を発音する原動力となる呼気が「優佗南」である。

　また「六餘声」の条では次のように説かれている。

「約統于六餘聲，◎（恩翁切，喉中折攝也，自心音唵遏，轉吽，爲噁阿之總。㊥㊦㊧㊨㊩（皆統于◎，而◎亦與五者分用。）皆折攝臍鼻之音也，烏阿之餘聲即本聲，支開之餘聲爲㊦，邪哇之餘聲爲㊩㊨，爊謳之餘聲爲㊥，其餘則皆◎矣。餘者尾也。出字則頭也。總之，呼三吸一，去而復來，升鼻之◎，本于臍◎。約爲小翕闢，大翕闢，藏于全闢全翕之用而已。日用不知，是故研幾爲難。」

筆者には「折摂」や「臍鼻之音」などの用語の意味がなお未詳であるが、「心音」の「唵」・「遏」の２音はおそらく悉曇のａṃ・ａḥにあたるものかと思われる。方以智等はこれらを中古音の山摂に由来する韻類の鼻音韻尾音節と入声音節に結びつけてとらえていたものではないだろうか。いずれにせよ、ここで言われている「◎（恩翁切）」は「六餘声」の１つであって、韻母を発音して最後に残る音であり、一般の５母音で終わる以外の音節はこれで終わるのだと言われているから、やはり、母音以外の韻尾を持つ音節の終わり方と関連がありそうだ。

　また先ほどの「波婆摩」といい、「優佗南」といい、「声原」が「発・送・収」節に至るまでの声母に関する考察に対して、悉曇学に見られる知見が影響を与えた事実が垣間見られて興味深い。

参考文献目録

『大廣益會玉篇』三十巻　梁・顧野王撰、唐・孫強校　元刊本　昌平坂学問所旧蔵本　国立公文書館（内閣文庫）蔵

『大廣益會玉篇』三十巻　明･弘治14年刊本　林家（大学頭）旧蔵本　国立公文書館（内閣文庫）蔵

『玉篇』台湾・国字整理小組刊

『玉篇の研究』岡井慎吾著　1969（再版）　東洋文庫

『大明萬曆乙丑重刊改併五音類聚四聲篇』国立公文書館（内閣文庫）蔵
『書文音義便考私編』明・李登撰　『續修四庫全書』所収
『音韻日月燈』明・呂維祺撰　京都大学人文科学研究所蔵
「切韻聲原」『方以智全書　第一冊　通雅』 1988　上海古籍出版社
「切韻聲原」『和刻本辭書字典集成』第七巻所収　1981　汲古書院
『湖南方言調査報告』（中央研究院歴史語言研究所專刊之六十六）楊時逢著　1974　台湾・中央研究院歴史語言研究所
『廣韻』 清・張氏澤存堂本　1986　藝文印書館
『宋刻　集韻』 1989　中華書局
『中國古今地名大辭典』1931・1982　台湾商務印書館
『汉语方言大词典』復旦大学・京都外国語大学合作編纂　許宝華・宮田一郎主編　1999　中華書局
『漢語大詞典』第三巻　漢語大詞典編纂委員会・漢語大詞典編纂処編纂　羅竹風主編　1989　漢語大詞典出版社
『西儒耳目資』明・金尼閣撰　北京大学出版社
「《西儒耳目资》声韵系统研究」曾晓諭1995 『語音歴史探索』南開大学出版社2004 pp.1～44
「金尼閣《西儒耳目資》所記的音」陸志韋 『陸志韋近代漢語音韻論集』商務印書館 1988　pp.94～108
『羅常培語言學論文選集』中国科学院語言研究所編　1963　中華書局
『等韻五種』 1975　藝文印書館
『周易本義』宋・朱熹撰　廖名春点校　2009　中華書局（「易学典籍選刊」）
『周易本義集成十二巻』元･熊良輔撰「易圖」（『通志堂經解』所収　1969　中文出版社）
『漢訳対照　梵和大辞典　増補改訂版』荻原雲来編纂　1979　講談社
『批判悉曇學』田久保周誉著　1944・1978　真言宗豊山派宗務所
「大智度論」龍樹撰　鳩摩羅什訳 『大正新修大蔵経』第25巻所収

【本稿は、科学研究費補助金（基盤研究（C））『「切字釈疑」訳注』（20520388）の助成を受けた研究成果の一部である。】